

萬葉に於て日本の感情を見る (一)

東京女子高等師範學校教授

石 井 庄 司

子ぎもの好きな越後の良寛さまのこころは、子ぎも黨の皆様にはずでにお馴染深いこころ存じます。

霞立つ長き春日に子ぎもらこ手毬つきつゝ今日も暮しつゝ子ぎもらこ手毬つきつゝ此の里に遊ぶ春日は暮れずこもよし

かういふ良寛さまの歌は日頃皆様の御愛誦のものと思はれます。良寛歌集の中には、實に尊い子ぎもの生活が数々詠みあげられてゐます。これはさうしても子ぎも黨の皆様の味方でありませう。

この良寛さまは熱心な萬葉集の愛讀者でありました。良寛さまの歌の善さは、結局萬葉集をよく讀まないごわかりません。そこで今度は皆様に、萬葉集の愛讀者になつていただきたく、少しばかり萬葉集のお話をいたしませう。

一、わらべ心

萬葉集は古い歌の集であることは先刻御承知の通りであります。それでは一體いつごろのものかご申しますと、ちよつと面倒であります。まづ萬葉集は何時の世に誰が輯

めたものかさいふこころが、わかりません。昔から實に多くの學者たちが研究に研究を重ねて來られたのですが、今日まだはつきりいたしません。極大體は、奈良時代の終り頃に、大伴家持(やかともち)か又はこの大伴家の一族に關係の深い誰かが編みおいたもので、今日は二十卷残つてゐるさいふ位しか言ふ事ができません。

今日傳はつてきてゐる二十卷の萬葉集には、長歌、短歌、旋頭歌せんとうといふ色々な歌の體があつて、その歌の數は合計約四千五百首よほといふこころになつてゐます。歌の數は、據りこころを異にする書物により、また數へ方により少しづつ違つてきますが、まづ四千五百首よほといふわけであります。

その四千五百首ばかりのうちで、歌の詠まれた事情やまた年代のわかつてゐるものだけだつて調べてみますと、時代の古いところでは仁徳天皇様の皇后磐姫いはひめご申す方の御歌があり、新しいところでは淳仁天皇様の天平寶字三年正月に大伴家持が因幡の國で詠んだ歌があります。その他、

歌の詠まれた事情の分らないものも多数ありますが、まづこの時代のものと思はれます。

さて仁徳天皇様の時代から淳仁天皇様の時代までは凡そ四百五十年間にあたりますが、四千五百首の歌が、四百五十年間に平均して散在してゐるかきいふに、さうではなく、舒明天皇様の時代から淳仁天皇様にいたるまでのものが最も多いといはれてゐます。

紀元二千六百二年の悠久な歴史を一本の線で書き現はすごいたします。するに、その半分のところは千三百一年となりませんが、いまから満千三百一年前はちようき舒明天皇様の崩御遊ばされた年になります。仁徳天皇様の御即位の年は紀元九百七十三年ですから、舒明天皇様の時代から約三百三十年前となり、淳仁天皇様の時代までは百十餘年になります。普通に云はれる萬葉時代は、二千六百二年のちやうき半分位の時代の前後四百五十年間を申すわけで、神武天皇様のお話からするにすつし新しいこととなり、すつしきれども西洋の歴史で申しますに、今日の米國は申すまでもなく英國も獨逸も佛蘭西もなかつた時で、紀元千三百一年は東ローマ帝國のコンスタンチヌス三世の時代であり、その翌年には、サラセン人がペルシャ軍を破つて、遂にペルシャ國の亡んだ年、支那では唐の太宗の時代となります。かう考へるに、また萬葉時代は大昔の話ともなりません。

その萬葉集の歌が、殆ど今日のまゝの言葉であり、誰にでも理解できる。いふことは、全くありがたい國柄のお蔭であります。かういふことは、世界の如何なる國家にも存在しない事實であります。

ヒサカタノアメノカグヤマコノユフベカスミタナビクハ
ルタツラシモ

いふ萬葉集の一首を新年の書初として、やつし片假名の書ける幼稚圖通ひの子きもに書かせてみたことがあり、するに、その子きもはずぐこの歌を暗誦いたしました。度々口ずさんで居りました。またそれを繪に描き現はしたりいたしました。大人の吾々が考へるよりも、子きもの素直な心にはよく理解されるものだ。いふことを経験いたしました。つくづく感じ入つたことでした。日本國民でありまた國語を話す人である以上は、萬葉集はあなたにもわかるものと思はれます。さうか奮つて萬葉集をお讀み下さいまして、その愛好者になつて戴きたいものと思ひます。

ひさかた^{あめ}の天の香具山この夕霞^{ゆふかぎり}たなびく春立つらしも

〔卷十、一八一—二〕

さきほび片假名で書きました歌です。卷十の最初にある歌で、春の雑歌となつてゐます。卷十は全部作者のわからぬ歌で、詠まれた時代もはつきりいたしません、大體奈

良に都を遷された頃のものとされてゐます。しかしこの歌は、大和三山の一である香具山のこゝを詠んでゐるのでありますから、まだ都が藤原宮にあつた頃のものと考へられます。凡そ千二百六・七十年前のものでせう。

「久方の」は小倉百人一首なきでよく御存じの言葉で、「久方の天」は「久方の月」は「久方の雲」なきも續く枕詞で、文字は、この外に「久堅の」も書きます。そこで天は久しく堅くいつまでも變らないといふ意味で附けたとも申します。しかし枕詞の意味に就いてはまだ權威ある説がありません。この歌では、「久方の天の香具山」も續きます、誦んでみて何さなくのさかな感がいたしませう。

天の香具山は、今も檀原神宮の東の方に低く見える山で、畝傍山・耳梨山と相對して、ちやうど三角形になつてゐます。伊豫國風土記によりますと、この山はもつ天上にあつたのですが、それがさうしたこゝか天から降つてきて、二つに分れ、片端は大和國に天降り、片端は四國の伊豫國に天降つたといふこゝであります。それで「天降りつく天の香具山」といふやうな言葉もあります。如何にも天降のできた山らしく、なつかしくよい山で、萬葉集にも度々出てきます。中でも舒明天皇様がこの山にお登りになつて大和の國を御覽になつた歌は、有名であります。小學國語讀本卷十二にも出てゐます。その御製には、

大和には群山あれど

こりよろふ天の香具山……

こ仰せになつて居ります。「こりよろふ」の「こり」は、接頭語の働きをなし、下に來る動詞の意味を強める役をしてゐます。「よろふ」は具足といふこゝで、よく備はつてゐるこゝであります。大和の國は周圍みな山で、多くの山々がありますが、その中でもよく具足したこゝの天の香具山をお詠みになつてゐるので、この山の美しさも十分わかります。

「この夕」は「夕」といつてもいいところですが、特に意味を強めるために、また自分の感情を出すために云つたものであります。「春立つらしも」の「も」は感動の助詞。「春が立つらしいよ」、もう春になつたよといふやうな心持であります。

そこで一首の大體の意味は、久方の天の香具山にこの夕方霞がたなびいてゐる。あゝもう春が立つらしいよといふこゝであります。

この歌は、或夕方に天の香具山に霞のたなびくのを望み見て、そこで春の到來に驚いてゐるのであります。曆の上の春から、觀念的に山の景色を眺めて、それを歌に詠むといふのは違つて居ります。まづ初めに、子ぎものやうな無邪氣な態度で山にむかひ、その山の景色の昨日と違つ

てゐるこゝに氣づき、そこから曆の上の春に氣がつくこゝにふ行き方でありませう。卒直な心、純粹な感情、しかもわづかな變化にもびりつゝ感ずるやさしい心を持ち、なほその上に大膽に卒直に自己の感懐をさらけだすこゝいふ力を所有するものでなければ歌へないものであります。こんなこゝを言つたら笑はれるだらうかとか、うんこすばらしい歌を作つて人をあつゝ言はせてやらうかとか、右顧左眎をするこゝいふこゝもなく、全く何のたくらみもけれんもない、真正銘のこゝろであります。それが萬葉集の歌の特色でありまして、千年のもゝをさな兒にも何かしら心よいものを與へるのだと思ひます。紀元二千六百二年の新年にあつて、私は大きな聲でこの歌を誦してみたいと思ひます。「春立つらしも、春立つらしも」、いざゆかん、諸共に……。

新しき年のはじめの初春はつはるの今日降る雪けふふかのいや重しげ吉事よきこと。

〔卷二十ノ四五二六〕

これは前にも申しました通り、萬葉集の歌の年代の分つてゐるものとして一番新しい歌で、淳仁天皇様の天平寶字三年に因幡守であつた大伴家持が、國司の館に郡司なごを集めて新年の宴會を開いたこゝに詠んだものであります。

それで歌もなんごなく儀式的の型にはまつたものでありませうが家持の作品としては普通の出來榮ご申すべく、新年の氣持はあらはれてゐます。

一首の意味は、新しい年のはじめの春の今日降る雪のやうに愈々よい事が澤山來てくれるやうにこゝいふのであります。雪の多い年は豊作だご申しますから、めでたい氣がしたのでありませう。またしんしんご降りしきる雪の中に多くのお役人の集つた光景は、草深い山陰の一都邑ではめづらしいこゝであつたのでせう。なほ雪がしきりに降るこゝご、吉い事が次から次へご繁く訪れるこゝいふのこゝはよい連想であるご思ひます。この歌は昭和十七年からにはちやうご一千百八十四年前の作品ごいふこゝになります。(つづく)